

中世末期ブルターニュの他者認識
- 『ブルターニュ大年代記』における *françoys* をめぐって -
The Recognition of Others in Late Medieval Brittany: The Image of *françoys* in
Les Grandes Croniques de Bretagne

中田 稔彬
Nakada Toshiaki

摘要

This article reviews recognition of France and French people from perspective of the historiography of late medieval Brittany. Stimulated by the argument of nationalism and ethnicity, the study of medieval historiography in Brittany shows that the formation of Breton identity traced back to medieval society. It also verifies that Celtic culture in the present Brittany has been artificially created in modern times.

However, as historiography tends to deal with self-consciousness of a social community, the concept of self and others has not been discussed deeply. Since the beginning of 21st century, there has been increasing research into alterity, that is to say *estranger*.

After all, based on the concept of self and others, scholars simply viewed *estranger* as those who arouse patriotism. Such a framework was also applied to recognition of France and French people, though they have had some political and cultural influence on Brittany. There was possibility of neglecting the similarity between the identities of France and Brittany.

This paper thus does not define *estranger* as the entire alterity, but takes account of the flexibility of meaning. It deals with the terms *françoys*, *francs* and *gallois* written in the chronicle *Les Grandes Croniques de Bretagne*, which was compiled by Alain Bouchart early in 16th century. Words are redefined according to the expanse of meaning and ambiguity. This examines how the chronicle describes the Franks, and then follows how the image of the Franks changes and connects up to *françoys*, who lived in the kingdom of France, in view of political context *Breton War of Succession*.

Under the framework of the flexibility of *françoys*, the similarity between France and Brittany is emphasised. The *françoys* and Bretons shared common cultural aspects, such as the Christian religion, the French language and Trojan-origin myths. During the Succession, the image of *françoys* was no longer that of the Franks, and it seemed substantial enough for contemporaries to recognise *françoys*. The relations between France and Brittany were regarded as siblings.

The placement of the two countries into sisterly relationship plays an important role in the rhetoric.

Brittany, actually annexed into France in 16th century, could exercise some privileges until 18th century. The retention of privileges in Brittany might have been attributed to the reconsideration of identity by the Breton chroniclers.

キーワード：ブルターニュ 中世 年代記 他者認識 *Brittany Middle Ages Strangers*

はじめに

本論文は、ブルターニュ公国がフランスへ併合される 16 世紀に書かれた年代記をもとに、いかにフランスあるいはフランス人が捉えられていたのかを探るものである。

フランス北西部に位置するブルターニュは、古くからケルト系民族¹が住み、今日までブルトン語が用いられるなどパリなどの中央とは異なる独自の文化を有する地方として知られている。もともとブリテン島に住んでいたブルトン人は、5 世紀にブリテン島からアルモリカ²へ移住し、いくつかの王国を建設した。それら王国は 9 世紀にブルターニュ貴族のノミノエによって統一されたが、10 世紀にはヴァイキングの侵入を受け、フランス王ルイ 4 世と臣従礼を交わすことを余儀なくされた。これがブルターニュ公国の始まりである。これを機にブルターニュにはフランス文化が流入し、貴族層はフランス語を用いるようになった。こうしてブルターニュは文化的にはフランスとの関係を強めていくが、他方で 12 世紀に成立したアンジュー帝国の影響によってイングランドとの政治的関係を強めた。そしてこのブルターニュの複雑な関係性は、ブルターニュ継承戦争（1341-64 年）をもって頂点を迎える。公位継承をめぐるイングランドが支援するモンフォール派とフランスが支援するブロワ派が争ったこの戦争は、最終的にフランス派が勝利した。これを機にフランスはブルターニュへの支配を強め、1532 年にブルターニュを事実上併合したが、税制や司法など一部特権はフランスに組み込まれることなく保持された。

このように中世ブルターニュは、政治的にも文化的にもフランスからの影響を大きく受けている。そしてブルターニュにとって 14 世紀から 16 世紀という時代は、公国の歴史を再確認する時代となった。なぜならブルターニュ継承戦争によって公国の独立性が脅かされ、結果的にブルターニュはフランスへの併合の道のりをたどったからである。この時期からいくつかの年代記が伝わっており、それらはブルターニュ公の権力を正当化する目的で編纂された。

しかしここで興味深いのは、ブルターニュが 16 世紀にフランスに併合されたにもかかわらず、税制や司法など一部特権は保持したことである。この結果は果たして偶然なのだろうか。フランスにブルターニュを完全に併合する力があつたにせよ、ブルターニュが独立性を保持するほどの国力を有していたにせよ、公国の権力を正当化するために作成された年代記は、単にブルターニュという国を称揚することを目的としていたのだろうか。そこにはフランスへの併合とブルターニュの独自性の 2 つを担保するレトリックが隠されていたのではないだろうか。そこで本論文では、ブルタ

ーニュの年代記においてフランスあるいはフランス人が当時どのように理解されていたのかを検証する。

本論文の構成は以下のとおりである。まず初めに中世ブルターニュ史に関する歴史叙述とアイデンティティ³の研究がどのようにおこなわれてきたのかを概観する。次に今回扱う年代記の性質を当時の政治的状況をふまえながら確認する。francs、françoys、gaulois の用語を取り上げ、それらの用語がどのように用いられていたのかについて整理する。そこから年代記において古代末期から中世初期のフランク人がどのように語られているのかを検討する。最後にそのフランク人のイメージがどのように中世を通じて受け継がれ、変化していったのかを、主に継承戦争という政治的状況を視野に入れて考察していく。

1. 先行研究

ヨーロッパにおいて歴史叙述というテーマは、20世紀後半以降の言語論的転回や歴史の物語論の登場によってさかんに議論されるようになった⁴。フランスではベルナール・グネをはじめとする歴史家たちが、歴史叙述に現れるイデオロギー性だけでなく、叙述行為自体にも目を向け、中世の人々の歴史認識を明らかにしようとした。歴史叙述は、ひとつの集団のなかで受け入れられた過去の説明を取捨選択するプロセスとみなされるようになった。そのなかで歴史叙述は、アイデンティティの形成において重要な位置を占めるようになった。

一方、ブルターニュにおける総合的な歴史叙述およびアイデンティティ研究が始まるのは1980年代以降である。確かに1970年代から言語学者の間で、今日のブルターニュを形容するケルト性が近代以降の産物であるという議論が展開されたり⁵、ブルターニュの「民族的起源」の所在に関する研究がおこなわれたりしていた⁶。しかし、そうした「ブルターニュらしさ」に関する研究を、考古学・文献学的な実証研究にとらわれず、記憶や歴史意識といったアプローチで扱ったのは、ジャン・ケレルベが最初である。当時のナショナリズム論やエスニシティの議論を背景に⁷、彼は年代記を素材として、中世ブルターニュの歴史叙述と歴史認識を明らかにしようとした⁸。彼によれば、中世末期ブルターニュにおける歴史叙述は、「単なる証拠ではなく、ブルターニュにとっての弁論であったり、記憶や連帯感、忠誠、*estranger* を想起させたりするものでもあった⁹」。ケレルベの想定する *estranger* は、具体的に *françoys* を指している¹⁰。しかしケレルベは *estranger* という語が表す意味や役割について、具体的な議論を展開するには至っていない。

実際、中世ブルターニュ史における *estranger*、すなわち他者研究が体系的におこなわれるようになったのは、21世紀になってからのことである。なぜならブルターニュだけでなく、中世ヨーロッパ史全体をみても *estranger* についての研究は、商人や巡礼者などそれぞれの集団の社会的特性に応じて個別におこなわれてきたからである¹¹。ローレンス・モールは「他者であり外部(*extraneus*)の存在」である *estranger* を、年代記や証書等から抽出し、2つに分類した。ひとつは外交官や商

人、傭兵など物理的に外部の存在であり、もうひとつは *françoys* などイメージによって認識されたエスニック集団あるいは政治的集団である。モールは *estranger* の実社会での役割と年代記作者による認識を明らかにしようとした¹²。つまり *estranger* という用語は、物理的に公国の外に存在する者を表すだけでなく、公国の政治、利益、文化的規範から逸脱する存在をもあらわしていた。

この *estranger* の存在に、フランスへの併合とブルターニュの独自性の 2 つを担保するレトリックが隠されているのではないかと筆者自身は考える。なぜなら *françoys* はブルターニュにとって必ずしも他者ではないからである。ケレルベもモールも、*françoys* を完全な *estranger* として扱っているが、*françoys* がブルターニュの独立性を脅かす敵だとしても、実際に年代記ではブルターニュとフランスの共通点が言及されている。ブルターニュは独立性を脅かされながらも、結果的にはフランス併合後も特権を維持している。確かにブルターニュにおいて「いかなる *estranger* も我々にとって見知らぬものであり、我々の地方と公国の出身ではない¹³」者であった。しかしこれは公国の権威を保持するために採用された観念であり、実際はより広範で複雑である。政治的コンテキストによってその存在は自己集団と想定されるものの内部に包摂されたり、複合したりするのではないだろうか。

したがって本論文では、*françoys* を完全な *estranger* として扱うのではなく、年代記が作成されたコンテキストをもとに *françoys* の存在を再構成する。その際に用いるのが、ブルターニュのフランス併合前夜に出版された『ブルターニュ大年代記』である。次章ではその年代記のコンテキストについて見ていく。

2. 『ブルターニュ大年代記』とアラン・ブシャール

中世末期ブルターニュの歴史叙述において、アラン・ブシャール (Alain Bouchart) の『ブルターニュ大年代記』は、ブルターニュのアイデンティティ形成において重要である。なぜならこの年代記は、ブルターニュのフランス併合前夜の 1514 年に初版が刊行されたからである。彼の著作は 1541 年までに 5 回刊行されている。今回、史料として扱うのは 1514 年の初版である。初版はジャン・ド・ラ・ロシュ (Jehan de La Roche) によってパリで刊行され、現代までに 14 冊の写本が見つまっている。このパリで刊行されたという点は見逃せない。なぜならブルターニュ公妃であり、かつブシャールに年代記編纂を許可したアンヌ・ド・ブルターニュは 1491 年にフランス王シャルル 8 世と結婚し、1499 年にはルイ 11 世と再婚したからである。その結果、事実上ブルターニュはフランスに併合された。したがって年代記がもつ政治的意味合いは大きい。

そしてもうひとつ重要な側面は、前代の他の年代記に比べて彼の考えが広く流布した可能性があるということである。ブルターニュにおける活版印刷は、フランスの他の地域に比べておよそ 15 年遅れて登場する¹⁴。活版印刷のおかげで、年代記は歴史と地域的なプロパガンダを結びつけることに成功している¹⁵。とくに 1532 年のものには 16 枚の木版が挿入され、視覚的にブルターニュの

歴史を伝えている。

アラン・ブシャール（?-1514年以降）は、ゲランド半島の小貴族の家に生まれたと推定されている。彼の家系は14世紀にブルターニュの海軍大将として活躍したニコラ・ブシャール以来、有名になった¹⁶。アラン・ブシャール自身は主に法律家として宮廷で活躍した。1471年、彼はゲランドで公証人を務めていた形跡がある。1484年にはブルターニュ公フランソワ2世の書記官となり、1491年以降はフランス王シャルル8世の顧問官を務めた。彼にとって歴史の集成は本業ではなく、二次的なものだった。しかし彼の取り組みは近代以降の歴史家に通ずるものがある。彼にとって「歴史は歴史家のものであり歴史家が見たり認識したりして解釈したものである。歴史は真の理解にしたがって、文書という形で現存する出来事を文書で再収集すること¹⁷」であった。彼は、当時公妃であったアンヌ・ド・ブルターニュ（1477年-1514年）から史料閲覧の許可をもらい、「自分が文書を通じて見たり読んだりしなかったことは何も書き加えない¹⁸」ようにしていた。その結果、彼は「ブルターニュという高貴な土地を全体的に構成する契約も書物も見つからない¹⁹」ことに驚いた。

ブシャールはフランス語で執筆をおこなった。実際、14-16世紀にかけてブルターニュではフランス以上にフランス語の役割が大きくなっていったようだ。議会による文書の検閲方法は、ブルターニュではフランス語表記に基づいていたのに対し、フランスでは依然としてラテン語に頼っていた²⁰。フランス語、すなわち俗語の発展は地域感情の発展において重要であった²¹。また彼は詩ではなく、散文の形式で執筆をおこなった。なぜなら論証を韻という枠組みのなかでおこなうには限界があったからである²²。

このようにブシャールがフランス語で執筆をおこなった背景には、当時のブルターニュの教育環境が関係していると考えられる。なぜなら当時のブルターニュには大学が不足していたからである。中心部のナントに大学ができるのは1460年のことである²³。それ以前の知識人の多くは近郊のアンジェやオルレアンなどで教育を受けていた。例えば、1378年から1394年にかけてオルレアンへ輩出された生徒の数は、カンペールから11名、レンヌとトレギエからそれぞれ9名、レオンから7名、サン・マロから6名、ナントから3名であった²⁴。彼らはのちに公国の高官や司教、修道院長、公の書記官、公証人となった。このようにブルターニュにおいて社会的に重要な役割を担う人物は、フランスの大学出身であった²⁵。ブシャールが生まれた15世紀後半においてもその状況は変わらず、彼もまたフランスで教育を受けたものと考えられる。その結果、ブシャールはブルターニュ出身でありながらも、フランス文化の影響を大いに受けることになった。実際に彼は年代記執筆にあたって、トゥールのグレゴリウスやフロワサールなど、中世フランスの年代記作成において重要となる作品を参照している。

以上のようにブシャールはフランスで教育を受け、フランス国王の顧問官を務めた経験をもとに、年代記を執筆していた。したがって *françoys* を完全な他者と断定することは難しい。では実際に彼が *françoys* をどのように捉えていたのだろうか。次章以降では彼が描いた *françoys* 像を具体的に

見ていく。

3. francs、françoys、gaulois -そのイメージの連続性-

『ブルターニュ大年代記』において、フランク人あるいはフランス人を表す言葉は francs、françoys、gaulois の 3 つである。ではこれらの語句は年代記においてどのような形で現れるのだろうか。まずその用語について簡単に整理しておこう。

年代記では françoys の方が francs に比べて圧倒的に多く登場する。francs という用語には、エスニックな集団という意味はほとんどない。唯一、クロタール 1 世とキルデベルトに言及する際に彼らをフランク人 (francs) の王と形容しているが、これは例外的な事例である²⁶。他にも francs archiers²⁷ という用語があるが、これは一般的に自由射手と訳され、フランク人とは区別される。この用語はおそらく百年戦争期に名を挙げたイングランドの長弓兵の対抗概念として示されている²⁸。したがって『ブルターニュ大年代記』においては、françoys と francs の明確な使い分けはない。

一方で françoys を表す用語としてガリア (gaule) やガリア人 (gallois²⁹) という言葉は、しばしば用いられている。ブシャールは年代記のなかでガリアという言葉 を 6 回使用しているが、どうやらブシャールは françoys とガリアを混同しているようである³⁰。彼によれば、ブルートゥスがガリアに来たとき、ガリアは 10 または 12 の王国に分かれていたという³¹。ブルートゥスの甥であったトゥルヌスはガリア人によって殺され、ベリヌスとブレンヌスがそのガリア人の領土を征服した。その後、ガリアはローマの支配下に置かれることとなった。

françoys への最初の言及は、ガリアに定住したフランク人に関連している。彼らは、ユリアヌス帝がガリアに赴任した際にライン川周辺のアルマニアにいたシカンブリ族であった。そのシカンブリ族がガリアに定住して以降、françoys と呼ばれるようになった³²。その françoys は「ライン川沿いのアルマニア、フランクフルトに定着し、それ以来ローマ人との抗争のためにアラン人やアルマン人と戦っている³³」。ブシャールの記述の特徴は、民族集団が特定の地域と結びついている点である。特定の集団と土地の結びつきはアイデンティティ形成において重要であり、不可分である³⁴。なぜなら特定のエスニック集団と土地とを結びつけることは、もともと原初的な他者認識だからである。

このように『ブルターニュ大年代記』に登場する初期の françoys という名称は、シカンブリ族やガリアに住む人々と混同され、一義的な意味をもっていない。françoys をガリアやガリア人と表記するブシャールは、françoys の祖先への強い関心を抱いていない印象さえある³⁵。実際、ブシャールがガリアについて言及する際に用いた史料は『ガリア戦記』である。ブシャールはカエサルの見方を踏襲し、ガリアはベルガエ族のガリア、セヌ族のガリア³⁶、アキタニア³⁷のガリアの 3 つに分かれていと説明している。これらの表現は中世を通じて用いられるが、単にガリア (Gallia) と用いる際にはガリア・ケルテイカを指している³⁸。

ここで興味深いのがブシャールは、*françoys* という名前の起源について言及していない点である。ブシャールに先行するブルターニュの年代記作者たちは、*françoys* の名前の起源について言及している。例えば 14 世紀に『ブルターニュ公、善良なるジャンの書』を記したサン・タンドレや、15 世紀末に『ブルトン人の歴史と年代記の集成』を編纂したル・ポーは、トロイア伝説を引き合いに出し、*françoys* という名称がヘクトルの息子であるフランコン (*Francon*) に由来すると述べている³⁹。とくにル・ポーは『フランク人の事績』から着想を受け、「トロイアからの家系の残忍さ (*la ferocité d'une lignée descendue des Troyeans*)」を引き合いに出し、*françoys* の名前の由来を説明している⁴⁰。ところがブシャールは *françoys* の民族的な起源について言及せず、ブルターニュの他の年代記作者と同様、*françoys* がブルトン人と同じくトロイアに起源を有していると述べるにとどまっている。彼が意図して詳細な記述をしなかったのか、あるいは政治的な力学が働いたことで書けなかったのかは断定できない。ただし少なくともトロイア起源伝説はブルトン人ばかりでなく、フランス人においてもドイツ人においても、重要なものだった⁴¹。西欧全体で見ても、「1080 年以降、王族や貴族の大多数の家系はトロイアに続く系図をもっていた⁴²」のである。

結局のところブシャールが関心を持っていたのは、*françoys* と土地との結びつきである。そして特定の領域と結びついた民族集団は、その集団の長によって示された⁴³。*françoys* に関してその傾向が現れてくるのは、シャルルマーニュの治世以降の記述においてである。*françoys* の初期のイメージ形成を担った人物は、ルイ敬虔帝であった。「シャルルマーニュの死後、ルイ敬虔帝はブルターニュを支配下に収めようとしたがうまくいかず、(中略) その結果彼は軍隊を動員し、まさに大きな敵意でもってブルターニュへ侵入した。(中略) 彼は以前にもこの地域を破壊し、彼に従わない者は皆殺しにした。(中略) この戦いでブルターニュ王のマルコヌス (*Marchonus*) は、フランク人の軍役についていたシャルルと呼ばれる公によって殺された⁴⁴。(中略) すぐ後にブルトン人は反抗し、フランク人を公国の外へ追い返した。その結果、ルイ敬虔帝が境界に配備したフランクの軍隊は、ブルターニュに侵入し、そこを荒らし、無残にも破壊した⁴⁵」。このようにルイ敬虔帝の存在は、ブルターニュにとって敵意を喚起するものとして描かれている。敵意を喚起するエピソードは『ブルターニュ大年代記』において典型的なもので、続いてシャルル禿頭王による報復が描かれている。845 年にバロンの戦いでブルターニュ王ノミノエに敗れたシャルルだったが、彼はブルターニュ王位を否認している。「そうした異教徒が彼らの人々とともに引き上げ、先に述べたネオメニウス (*Neomenius*) の人々が武力でもってブルターニュ王国の掌握を取り戻した。なぜならルイ敬虔帝が亡くなったからである。ネオメニウスはルドンの初代修道院長であるコンヴォイオン (*Convoyon*) をローマに派遣した。(中略) その目的は (ブルターニュ) 王国が 71 年にわたって *françoys* の支配に苦しめられたからであった。(中略) それに対してシャルル禿頭王は秘密裏にローマに伝言を送った。そこではネオメニウスが王の位を有することを認めておらず、その王位はフランク王に帰するものである⁴⁶」。

こうした集団のイメージは、さらに戦いの場面でもって強化される。なぜなら歴史叙述はいわば

戦いの歴史であり、戦いの場面でもって民族集団のイメージを想起させるからである。戦いの場面において *françoys* は「好戦的」であった。そのイメージは時に「愚かさ」といったネガティヴさを伴っている。戦いにおける *françoys* の姿は、しばしば高慢さ (*l'outrecuidance des François*) を想起させている。「トルコ人との戦いに赴いた *françoys* は前衛を任されていたが、ハンガリー人を待つことなく前進したために全員が死ぬか捕虜にされた⁴⁷」。そしてその高慢さはときに度を越していた。なぜならイングランド王がアルフルールの街を返すかわりにあらゆる損害の補償をフランス王に求めたとき、フランス王はそれを無視し、戦いを続けようとしたからである⁴⁸。そしてこの高慢さはときにブルターニュ公にも向けられた。フランスの軍隊と合流したブルターニュ公ジャンだったが、すでにフランスの軍隊は彼を待たずに戦いを始めていた。公は「死者と捕虜、そしてその軍隊の長の高慢さによって王国にもたらされる不名誉を哀れに思った⁴⁹」。

françoys の高慢さは、やがてブルターニュ継承戦争がおこると、ブルターニュ外にも波及していくことになったようだ。継承戦争の際にロンドンの農民たちがヘンリ王に対して軍隊を差し向けることに異を唱えた。なぜなら *françoys* が好戦的だったからである⁵⁰。この時代には *françoys* の姿は単なるエスニック集団としてのそれではなく、フランス王国を形成する存在であった。トロイア起源以降に形成されたフランク人のイメージは、継承戦争を通じて中世末期へと引き継がれ、フランス王国を構成する *françoys* として結晶化されていく。次節ではエスニック集団であった *françoys* のイメージが継承戦争を経て、中世末期のブルターニュにどのように伝わっていったのかを検討していく。

4. 「bons françoys⁵¹」-フランク人からフランス人へ-

françoys をイメージする要素としてまず挙げられるのが、外見である。中世において外見は、他者認識の上で重要な位置を占めていた。なぜなら外見から他者との違いを理解することは最も単純で、原初的な方法であり、「身体的な描写がモラルに反する悪徳や自己集団の美德へと帰結する⁵²」からである。しかし『ブルターニュ大年代記』において *françoys* の見た目が詳細に言及されていない⁵³。外見というより服装に関する言及のみで、*françoys* は戦いの場面において「着飾っていて身なりはきちんとしていた⁵⁴」。

ここで興味深いのが、ブシャールが集団を特定する際に外見という要素を無視していたわけではないということである。それを示す事例としてタタール人の記述がある。タタール人のイメージを形成する要素として、ブシャールはまずは身体的特徴を挙げている。タタール人は「とても醜い容姿をしている。身体はとても小さい。見開いた大きな目を持ち、恐ろしい視線をしている。彼らの顔は大きく、額は広く、平らで大きな鼻を持ち、鼻孔は開いている⁵⁵」。

さらにブシャールは、身体的特徴のほかに宗教観、法慣習、性質、戦い方の4つの観点からタタール人を描いている。一神教の信者であるタタール人は、大ハーン（最高権力者）に選ばれるので

はなく、実力でその地位を手にする。彼らは高慢さと残忍さ、放蕩さを持ち、戦いにおいては非常に巧妙である⁵⁶。このようにブシャールは、ある集団を規定する判断基準をもっていた。先代の年代記作者たちと異なり、françoys についてはタタール人のような明確な記述は見られないが、françoys をイメージする上で宗教観、法慣習、性質は重要な要素であった。

そのなかでも宗教は françoys のイメージを形成する要素として大きな位置を占めている。françoys はブルターニュと同じくキリスト教を信仰している。しかしそこにはブルターニュとの若干の差異がある。ブシャールは、ブルターニュがフランスよりも早くキリスト教化されたことを述べている。「パリに聖ドニが訪れるのは、聖クレアによってキリスト教信仰がアルモリカのブルターニュにもたらされてから 20 年後の紀元後 92 年のことだった⁵⁷」。この聖クレアによって最初にアルモリカにキリスト教信仰がもたらされたのはナント⁵⁸で、ペテロが亡くなった翌年のことだった。さらに彼は、ブリテン島の王ルキウスがその民とともに 185 年に洗礼されたこと、初代ブルターニュ王コナン・メリアデックが 400 年に洗礼を受けたこと、これに対してクローヴィスが 500 年にフランスで初めて洗礼を受けたことを強調し、キリスト教化の遅速を基準として、フランスとブルターニュの差別化を図っている⁵⁹。

慣習、とくに法慣習はある集団を特徴づける際に重要である⁶⁰。継承戦争の原因となったのは、ブルターニュとフランスで法慣習がそれぞれ異なっていたからである。サリカ法典からつづく伝統によって、王位が「フランスで知られる慣習では女性に継承されることも、その分け前に与ることもあってはならなかった⁶¹」。しかしブシャールが法慣習に関心を抱いていたことは驚きに値しない。なぜなら法曹界に精通していたブシャールはフランス王国の宮廷に出入りしており、かつフランスの王位継承順位に関する問題が前例として存在したからである。1328 年、カペー朝最後の王であるシャルル 4 世が世継ぎを残さずに亡くなると、フランスの高位聖職者と領主は、従弟であるヴァロワ家のフィリップを王として認めた。このとき彼らは、シャルル 4 世の姉イザベルの夫であったイングランドのエドワード 3 世をフランスの王に任命しなかった。この前例は公位継承においてある程度の効力を発揮していたと考えられる。こうした背景からブシャールは法慣習に対して非常に敏感になっていた。彼は殺戮や略奪、裏切りなど戦争において凄惨な出来事を記述することに関しても慎重であった。戦争における道徳的責任について言及する際にも、フランスを直接非難することを避けている⁶²。

外見に次いで、強い力をもっていたのが言語である。なぜならブシャール自身、フランス語話者であり、フランス語とブルトン語は「同じ口で雄弁に発音するにはとても難しい言語⁶³」だからである。言語が集団認識に与える影響力は、古代末期からすでに存在していた。マクシミアンがブリテン島からアルモリカに人を住ませた際に、アルモリカの女性はブルトン語を話さないという理由で舌を切り落とされた。その結果、アルモリカではブルトン語が話されるようになった⁶⁴。しかし言語は必ずしもフランスとブルターニュを隔てる決定的な要素とはなり得なかった。なぜならブシャールはブルターニュ内でブルトン語とフランス語が話されていることを認めており、その地域

的境界についても理解していたからである⁶⁵。

このように見た目（服装）、宗教、法慣習、言語によって *françoys* のイメージが形成されていく。しかしそれらの要素が全てではない。実際には政治的なコンテストに応じて、*françoys* のイメージは流動的に変化していた。そのような *françoys* の柔軟なイメージをつくりだしたのが継承戦争であった。この戦争でブルターニュ内部のとある集団が *françoys* へと外部化された。その事例が反逆（*trahison*）である⁶⁶。裏切りという行為は、自己集団の一部を他者化するプロセスのひとつに位置づけられる。継承戦争期には世襲財産の保護を優先して、フランスに味方するブルターニュの上層貴族が多くいた。とくに高ブルターニュに領地を有する領主はフランスにも領地を有しており、家系の中にはフランス王国の人間と婚姻関係を結ぶ者もいた⁶⁷。例えば、フレミニーの戦いにおいてブルターニュの人々は *françoys* と合流し、イングランド人に対抗している⁶⁸。とくにロアンやラヴァル、クリソンの領主たちがそうだった。これにはイングランド人の評判の悪さも関係しており、なかば消去法的に領主たちはフランス側に味方した。「しかしブルターニュの領主であったロアンの副伯や、ラヴァルやクリソンの領主たちはその地方の有力者であり、とても良き *françoys* であり、公に言い切った。わが君主よ、あなたがフランス王に対抗してイングランド側についたと我々が判断したとき、我々はあなたを見限って、フランス側につくだろう⁶⁹」。

この「良き *françoys*」は、ブルターニュにおける諸権利を放棄することにはならなかった⁷⁰。継承戦争によって、もともと多層な封建関係によって複雑だったブルターニュとフランスの政治的関係はより一層複雑になった。したがってイングランド側につくにせよ、フランス側につくにせよ、その派閥争いは個人的なレベルで語ることはできなくなった⁷¹。

ブシャールは、ブルターニュの陣営の分裂を必ずしもフランスへ亡命した裏切り者のせいにはしていない⁷²。実際、ブルターニュ陣営の分裂の原因となったのは公であった。なぜなら公はボーージュへの反抗に加わり、オルレアンをルイを迎え入れたことで、ブルターニュの領主の反乱を招いたからである⁷³。しかし基本的にブシャールは公国分裂の引き金となった人物や、私利私欲から公国の利益を裏切ってフランス側に寝返った者を糾弾している⁷⁴。それはレトリックの問題であり、政治的な背景を考慮したものである。これは結果的にフランスに対するブルターニュの忠誠を想起させることになり⁷⁵、アンヌ・ド・ブルターニュがフランス王妃となったことでそれは象徴化された。

継承戦争の記述に関して、ブシャールは公の権力の正当化を最優先に考えている。彼は、ブルターニュ公の親イングランド的な考えにニュアンスを与えようとしている⁷⁶。イングランドの支援を受けて公位についたジャン 4 世は、「非常に巧妙で対抗的であり、常にフランス的というよりはイングランド的な勇敢さをもっていた⁷⁷」。しかしフランス王にとって、「モンフォール伯（ジャン 4 世）がブルターニュ公としてイングランド王に臣従礼を誓ったことが大きな罪であり、イングランド王はフランスの古くからの敵でもあった⁷⁸」。しかしブルターニュ公は暗黙のうちにイングランドに味方する必要があった。なぜならそれによって公国を再認識することが可能となったからである。「このとき統治者たるフランス王がシャルル・ド・ブロワ派の者を軍隊から排除しようとしていた。

しかしジャン征服公（ジャン 4 世）は、公国の回復と保持のために、フランスの古くからの敵であるにもかかわらずイングランド人を助けることを余儀なくされた⁷⁹。その結果、イングランド人はブルトン人の領主よりも公に対して忠実だった。しかし他方でブシャーは、イングランドと手を組んでも問題ないと言及している。なぜならイングランド人はブルトン人と同じキリスト教徒だからである⁸⁰。ブシャーにとって、ジャン 4 世の親イングランド的な方針を非難することは、暗黙のうちにブルターニュの過度な親フランス的な政策を糾弾することだったようだ。

このようにイングランドに対する見方が不安定な理由の一つに、フランスに肩入れしたことで失敗したイングランドの教訓が前提にある。ランカスター公は、主人であるリチャード王を捕らえた。なぜならイングランドを危機に陥れたのはリチャード王だったからである。「あなたはあまりに *françoys* を慕って、平和を乱し、あなたの王国に恥をもたらした。そしてあなたに対してそのことをとがめた者たちは殺された⁸¹」。*françoys* に執着したリチャード王が原因で、イングランドはフランス化する危険があった。この事例はブルターニュにしてみれば、他人事ではなかった。このときブルターニュの尚書院はイングランド王に対して以下のように述べている。「ノートルダムのお体によってたとえあなたが我々の軍隊を指揮するために、すぐさま我々にその若い君主を与えなくても、我々の敵あるいは苦悩となるものの方針のもとに全てを貶める危険がある。そしてブルターニュ公国がまさにフランス的なものとなるだろう⁸²」。

以上のように、ブシャーは *françoys* を記述する際に見た目、宗教観、法慣習、性質といった要素から描いていた。そして *françoys* の行いは継承戦争によって判断された。

おわりに

『ブルターニュ大年代記』に現れる *françoys* の姿は、必ずしも首尾一貫していない⁸³。なぜならこの年代記が書かれた 15 世紀末から 16 世紀初めにかけて、フランスとブルターニュが政治的な関係を強めたからである。*françoys* という言葉は、おおよそフランス王国に住むという意味で捉えられていた⁸⁴。しかし 1491 年フランス王シャルル 8 世と公妃アンヌ・ド・ブルターニュが結婚したことによって、*françoys* は単なる他者ではなくなった。フランスとブルターニュはいわば兄弟関係となった。なぜならブルトン人と *françoys* はお互いにアラヌスの子である *Hisicion* から生まれ、同じキリスト教を信仰しているからである。

しかし継承戦争の勃発によって、*françoys* の存在は単なる隣人やエスニックな集団として認識されるものではなくなった。公国の独立性が脅かされたことによって、ブルターニュはより国としての一体性を強めなければならなかった。*françoys* の存在は常に流動的で、政治的コンテクストに応じて様々な価値づけがなされていた⁸⁵。『ブルターニュ大年代記』における *françoys* 像の一貫性のなさは、*françoys* に対する価値判断の保留に起因する。なぜならブルターニュのアイデンティティ形成にとって *françoys* の存在は必ずしも「フランス嫌い」と同義ではないからである⁸⁶。ブシャー

ルは年代記において、公国の正当性と国への忠誠を優先しているが、françoys を敵として固定化することはなかった。

françoys に対するブシャールの認識は、結果的にフランスとブルターニュの融和をもたらしている。継承戦争後、フランスとブルターニュはまるで同じ平和を享受するかのように語られる。「以下のことが言われ和解した。戦争、そして不一致と分裂の時期にブルターニュにいた、あるいはかつていた françoys、そしてブルターニュの人々も同様に、それぞれ自分たちのところへと確かにそして安全に戻ることができた⁸⁷」。ブシャールが望んだことは、ブルターニュの独立性を維持することだったが、実際にその願いはブルターニュ内の権力層の分裂によって叶わなかった。しかし彼のレトリックはブルターニュとフランスの橋渡しともなった。1531年にフランスの一地方となったブルターニュが18世紀末まで独立した権利を維持できたのは、多かれ少なかれブシャールのような年代記作者の考えに基づいているのかもしれない。こうして兄弟としてのフランスとブルターニュという関係性が、結果的にブルターニュの独自性を守ることに繋がったのである。

1 今日「ケルト人」と呼ばれる人々は、紀元前1000年前後にヨーロッパ中・西部に定着したインド・ヨーロッパ語系の一部族である。ブルターニュにおいてケルト人意識が芽生えるのは近代以降で、それ以前はブルトン人が一般的な呼称であった。ケルトについては以下を参照。小辻梅子、山内淳編『二つのケルト その個別性と普遍性』、世界思想社、2011年。

2 アルモリカという語句は、Are morica（海沿いの地域）というラテン語に由来し、現在のブルターニュとほぼ同じ地域を指す。

3 この論文ではアイデンティティという概念をひとつの集団への帰属意識と捉え、その主体を年代記作者、すなわち知識人に定める。

4 青山秀紀は中世ネーデルランドの歴史叙述をもとに、領邦や都市のアイデンティティ形成について論じている。青山秀紀『記憶のなかのベルギー中世：歴史叙述にみる領邦アイデンティティの生成』、京都大学学術出版会、2011年。

5 Claude-Gilbert Dubois, *Celtes et Gaulois au XVI^e siècle. Le développement littéraire d'un mythe nationaliste*, Paris, 1972.

6 言語学者のレオン・フルリオの著作は、考古学・文献学的な実証研究の古典として評価されている。Léon Fleuriot, *Les origines de la Bretagne*, Paris, 1980.

7 アンダーソンやスミスらが展開した、近代のナショナリズムの起源は中世にあるという議論を受けて、ミシェル・ジョーンズはブルターニュでも地域的なアイデンティティの萌芽が14世紀からみられると主張している。Michel Jones, *The Creation of Brittany*, London, 1988.

8 Jean Kerhervé, « Aux origines d'un sentiment national. Les chroniqueurs bretons de la fin du Moyen Âge », dans *Bulletin de la société archéologique du Finistère*, Bd.108, Quimper, 1980.

9 *Ibid.*

10 *Ibid.*

11 Frank Akehurst and Cain Vain d'Elden (ed.), *The Stranger in Medieval Society*, Mineapolis, 1997.

12 Laurence Moal, *L'étranger en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes, 2008, p.29.

13 « Aucuns estrangers à nous incongnuz et non originaires de notre pays et duché », dans *Registre de chancellerie B8*.

14 最初の活版印刷が現れるのはパリでは1470年、リヨンでは1473年、アンジェでは1477年、トゥールーズでは1479年、カーンでは1480年。Diane Booton, *Manuscripts, Market and the Transition to Print in Late Medieval Brittany*, Farnham, 2010, p.3.

15 *Ibid.*, p.114.

16 Etienne Port, « Alain Bouchard, chroniqueur breton », dans *Annales de Bretagne*, v.36-3, 1924, pp.496-527.

- ¹⁷ « ystoire vient de historin qui est interprété veoir ou cognoistre... Histoire selon son vray entendement est la recollection par escript des faits présens à l'escripvant... », Alain Bouchart, *Epistole*, f.1.
- ¹⁸ *Ibid.*, f.2.
- ¹⁹ *Ibid.* さらに、Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, éd. Marie-Louise Auger, Gustave Jeanneau, 2vols., Paris, 1986, vol.1, p.210.
- ²⁰ Jean Kerhervé, « Aux origines... », *op. cit.*, p.175.
- ²¹ エーリヒ・アウエルバッハ著、小竹澄栄訳『中世の言語と読者-ラテン語から民衆語へ-』、八坂書房、2006年。
- ²² 14世紀から16世紀初めに編纂されたブルターニュの年代記は全部で9点ある。1点を除いてフランス語で書かれており、形式も散文が好まれている。ジャンルに関しては系譜史、普遍史、地域史の3つがあるが、今回扱うブシャールの作品は普遍史に分類される。詳しくは以下を参照。Jean Kerhervé, « Aux origines... », *op. cit.*, p.173.
- ²³ 1414年、ジャン5世はナントに大学を創設しようとしたが失敗した。Marcel Fournier (ed.), *Les statuts et privilèges des universités françaises depuis leur fondation jusqu'en 1789*, 3vols, Paris, 1890-1892, pp.1588-1595
- ²⁴ *Ibid.*, pp.1888-1891.
- ²⁵ *Ibid.*, pp.1897-1898.
- ²⁶ Laurence Moal, « Les peuples étrangers dans les chroniques bretonnes à la fin du Moyen Âge », dans *Revue historique*, Paris, 2009, t.651, p.526.
- ²⁷ Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, pp.441.彼らは弓兵としてフランス王国に従事することで、人頭税が免除されていた。この概念はおそらく1425年以降、ブルターニュ公が組織した弓兵部隊に由来する。Claude Gauvard, Alain de Libera, et Michel Zink, *Dictionnaire du Moyen Âge*, Paris, 2002.
- ²⁸ « ... ces Anglois qui sont moult bons archers... », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, p.332.
- ²⁹ *Ibid.*, vol.1, pp.86, 208, 257.
- ³⁰ « Jamais y ait eu es Gaule roys françois exempt des subsides romaines », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, p.376.
- ³¹ « Et est assavoir que pour lors y avoit es parties de Gaule dix royaumes selon Vincent ou douze selon la Martiniane. », Alain Bouchart, *op. cit.*, vol.1, p.85.
- ³² « En celuy an Julien l'Appostat, soubz la confidence de ss gens d'armes, usurpa le nom d'auguste alentour du Rin es parties d'Almaigne, esuelles parties residioient lors les Sicambriens qui sont les François ; lesquelz long temps après sont venus habiter es Gaulles et ont depuis nom de François », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.1, p.196.
- ³³ « ...les François qui se tenoient es Alemagnes sur le Rhin, à Francfort, combatirent lors contre les Alains et les Alemans pour la querelle des Rommains... », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.1, p.198.
- ³⁴ Jean Kerhervé, « Entre conscience nationale et identité régionale dans la Bretagne de la fin du Moyen Âge », dans *Identité régionale et conscience nationale en France et en Allemagne du Moyen Âge à l'époque moderne*, Sigmaringen, 1997, pp.219-243.
- ³⁵ Laurence Moal, « Les peuples étrangers... », *op. cit.*, p.524.
- ³⁶ « Or avoit semblablement conquis Cesar es Gaulles les Belgues, qui sont ceulx de Champagne ; les Sesnes, qui sont les Soysnes, avoit chasséz outre le Rin, et aultres rebelles des Gaulles avoit rengez à la raison. », Alain Bouchart, *op. cit.*, vol.1, p.111.
- ³⁷ « Celuy roy Salomon fut grandement assailly par les Gaullois et par ceulx d'Acquaine, lors payens, qui luy firent dure guerre en son royaume. », *Ibid.*, vol.1, p.208.
- ³⁸ Carlrichard Brühl, *Naissance de deux peuples. Français et Allemands (IX^e-XI^e)*, traduit de l'allemand par Gaston Duchet-Suchaux, édition française établie par Olivier Guyotjeannin, Paris, 1994.
- ³⁹ « Du Brut, qui fut nostre patron / Et de qui nous portons le nom ; Car de Brut est dit le Breton / Et Francois est dit de Francion », Guillaume de Saint-André, « Le livre du bon Jehan, duc de Bretagne », dans *Chronique de l'État breton*, éd. Jean-Michel Cauneau et Dominique Philippe, Rennes, 2005, p.266, v.639-642.
- ⁴⁰ Laurence Moal, « Les peuples étrangers... », *op. cit.*, p.515.

- ⁴¹ Ronald Asher, *National Myths in Renaissance France. Francus, Samothés and the Druids*, Edinburgh, 1993, p.9.
- ⁴² Colette Beaune, *Naissance de la nation France*, Paris, 1985, p.38.
- ⁴³ Laurence Moal, « Les peuples étrangers... », *op. cit.*, p.513.
- ⁴⁴ « Et après que Charlemaigne fut trespassé, Loys Debonaire son filz, roy de France, se voulut aussi atiltrer roy de Bretagne et tenir le pays en son obeyssance [...] A ceste cause celluy roy Loys se mist en armes et à tout grant host entra en Bretagne le plus puissant [...] et de la passa plus avant, degastant le pays et mettant à mort tous ceulx qu'il trouvoit à luy desobeysant. [...] et y fut Marchonus occis par ung duc de l'ost des François appellé Charles. », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.1, p.320.
- ⁴⁵ « Bien tost après, les Bretons se rebellerent et dechasserent hors du pays les François. A celle cause les gens d'armes de France que le roy Loys avoit laissé es frontieres rentrent dedens le pays, le bruslerent, peillerent et gasterent piteusement. », *Ibid.*, vol.1, p.321.
- ⁴⁶ *Ibid.*, vol.1, p.324.
- ⁴⁷ « Les François, qui estoient en l'avantgarde, se avancerent de vouloir combattre les Turcs et ne voulurent attendre les Hongres... et la furent tous les François mors ou prins. », *Ibid.*, vol.2, p.210.
- ⁴⁸ *Ibid.*, vol.2, p.252.
- ⁴⁹ *Ibid.*, vol.2, p.254.
- ⁵⁰ « ... car les François monstrent qu'ilz veullent la guerre », *Ibid.*, vol.2, p.240, p.252.
- ⁵¹ Michael Jones, "Bons Bretons et Bons Francs: the Language and Meaning of Treason in Later Medieval France", in *The Creation of Brittany*, Hambledon, 1988, pp.346-347.
- ⁵² Yves Lequin (dir.), *La mosaïque France : histoire des étrangers et de l'immigration*, Paris, 1988, p.58.
- ⁵³ 例えばサン・タンダレは、francoys を「よく櫛で梳かれ、枝分かれした髭をもち、柔らかくほっそりとした顔つき、すなわち傷ひとつない顔をしている」者として描いている。Guillaume de Saint-André, « Le livre du bon Jehan, duc de Bretagne », *op. cit.*, p.515, v.2821-2833.
- ⁵⁴ « et entre les autres, les François estoient moult bien parez et ordonnez. », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, p.86.
- ⁵⁵ « Les Tartarins sont de treslaide et hideuse forme ; moult petis sont en corpulence ; ilz ont gros yeulx moult larges, front large, les nez larges escachez et les narilles ouvertes outre mesure. », *Ibid.*, vol.1, p.444.
- ⁵⁶ *Ibid.*, vol.1, p.445, pp.447-448.
- ⁵⁷ « et arriva saint Denis à Paris l'an de grace .IIII.XX.XII. , qui fut vingt ans depuis que par saint Cler la foy crestienne fut apportee en Bretagne armoricque. », *Ibid.*, vol.1, p.139.
- ⁵⁸ *Ibid.*, p.138.
- ⁵⁹ « Lucius roy de la grant Bretagne, qui appellee est Angleterre, fut baptisé, et tout son peuple semblablement, des l'an de grace cent quatre vingts et cinq [...] Et l'an de grace cinq cens fut baptisé le premier roy chrestien Clovis, et fut le quinziesme an de son regne [...] fut Conan Meriadec roy chrestien cent ans entiers paravant que Clovys roy de France feust baptisé. », *Ibid.*, vol.1, pp.151-152.
- ⁶⁰ Laurence Moal, *L'étranger en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes, 2008, p.321.
- ⁶¹ « et que par la coustume notoire de France la femme ne doit point estre receue à succession ne à eschoicte de costé pourveu dont telle succession ou eschoicte descend... », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, p.42.
- ⁶² オーレでの殺戮に関するその責任を、フランス陣営のジャンヌ・ド・パンティエーブルに対して間接的に投げかけている。Jean-Christophe Cassard, « Les chroniqueurs et historiens bretons face à la guerre de Succession », *Chroniqueurs et historiens de la Bretagne du Moyen Âge au milieu du XX^e siècle*, Noël-Yves Tonnerre (dir.), Rennes, 2001, p.64.
- ⁶³ « francois et breton sont deux langaiges moult difficiles à disertement prononcer par une mesme bouche. », Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, p.505.
- ⁶⁴ *Ibid.*, vol.1, p.205.
- ⁶⁵ *Ibid.*, vol.1, p.204.
- ⁶⁶ *Ibid.*, vol.2, p.424.
- ⁶⁷ Laurence Moal, *L'étranger en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes, 2008, p.364.
- ⁶⁸ Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne*, *op. cit.*, vol.2, p.344-347.

⁶⁹ « Mais les barons de Bretagne, comme le viconte de Rohan, les seigneurs de Laval et de Clisson qui estoient les principaulx cheffz du pays, estoient tresbons François et disoient plainement au duc », *Ibid.*, vol.2, p.120.

⁷⁰ Gustave Jeanneau, « Le patriotisme breton du premier historien de la Bretagne », *Impacts. Revue de l'Université catholique de l'Ouest*, Angers, 1977, p.25.

⁷¹ Jean-Christophe Cassard, « Les Bretons, tous félons », dans *Félonie, trahison, reniements au Moyen Âge*, Montpellier, 1997, p.597.

⁷² Laurence Moal, *L'étranger en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes, 2008, p.371.

⁷³ Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne, op. cit.*, vol.2, pp.390-391, p.455, p.473.

⁷⁴ Jean Kerhervé, « Entre conscience nationale... », *op. cit.*, p.241.

⁷⁵ Hervé Le Roy, *Aspects de l'idéologie politique en Bretagne à travers les chroniqueurs (XIVe-Xve siècles)*, Bordeaux, 1995, vol.2, p.210.

⁷⁶ Laurence Moal, *L'étranger en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes, 2008, p.362.

⁷⁷ Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne, op. cit.*, vol.2, p.136.

⁷⁸ *Ibid.*, vol.2, p.46.

⁷⁹ *Ibid.*, vol.2, p.376.

⁸⁰ *Ibid.*, vol.2, p.377.

⁸¹ « Vous avez trop aymé les François et avez tendu à faire une paix à la confusion et honte de vostre royaume, et ceulx qui le vous ont remonstré avez fait mourir. », *Ibid.*, vol.2, p.230.

⁸² *Ibid.*, vol.2, p.265.

⁸³ Laurence Moal, *L'étranger en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes, 2008, p.352.

⁸⁴ *Ibid.*, p.352.

⁸⁵ 他者認識に関して、文化心理学的観点からの興味深い研究がある。ヤーン・ヴァルシナーは、他者に対する価値づけを (1)「不寛容な排除」、(2)「好ましくないものを好ましいものへ」、(3)「対比を除く」の3つに分類している。Jaan Valsiner, *Culture in Minds and Societies : Foundations of Cultural Psychology*, Los Angeles, 2007.

⁸⁶ Jean Kerhervé, « Entre conscience nationale... », *op. cit.*, p.241.

⁸⁷ Alain Bouchart, *Les Grandes Croniques de Bretagne, op. cit.*, vol.2, p.500.

